

---

# 月の砂漠～約束の鍵～

晴天

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

月の砂漠〜約束の鍵〜

### 【Nコード】

N4042E

### 【作者名】

晴天

### 【あらすじ】

女は弱さと強さを持った男に惹かれた。男達はプライドのために。そして女は自分の心の鍵を開けるために。女：「絶対なんてないでしょう」男：「絶対がないから、約束をするんだ」女：「約束をしてくれるのね」男：「必ず月の砂漠を二人で歩いていこう」

## 第1部 満月

『月の砂漠記念館』の前に背の高い女が立っている。

記念館の建物に続く石の階段に座り、呟くように歌う。

月の砂漠を はるばると

旅のらくだが 行きました

目の前には、満月の照らされた夏の海が広がっていた。

真紀と大山が知り合ったのは、真紀が25歳の時に派遣された建設会社だった。

大山が地方都市の支店から本社の営業に転勤になったのは、大学を卒業して10年がたった32歳のときだ。

大山は、背も低く胸板の薄い一見すると頼りない感じの男で、いつも捲くり上げたワイシャツの腕と顔が白く不健康そうな印象を与えた。

初めて会った時に「大山 おおやま 武士 たけしです。大きい山に武士 ぶしと書きます。身体も小さく、肝も据わっていないので、すっかり名前負けです」と情けなさそうに自己紹介された真紀は、思わず声をだして笑ってしまっただ。

「東上真紀（とうじょうまき）です。よろしくお願いします」

真紀は慌てて笑いを止め、真面目な顔で自己紹介をした。

大学を卒業して少しだけ小さな商社に勤めたが、すぐに人間関係が上手くいかず辞めてしまった。派遣になった時に「これからは、あまり職場の人と関係を持つのはやめよう」と心に誓ったはずだったが、大山の気取りの無い性格が硬いはずの心の扉をゆつくりと開けさせた。

「真紀、後でこの書類を清書しておいて」

最初は気の弱いだけの男だと思っていたが、案外図太いところもあり、「東上さん」から「真紀ちゃん」に変わり、1年を過ぎた頃には「真紀」と呼び捨てにするようになっていた。その移り代わりが自然だったので、真紀も嫌な気持ちにならずに、心地よく呼び捨てを受け入れていた。

「大山さん、パソコンで書いたものは清書じゃなくて校正です。1度ぐらい読み直したらどうですか？毎回誤字を探しながら読むから内容なんて頭に入りません」

真紀も最初は「主任」と呼んでいたのだが、いつの間にか「大山さん」になっていた。あまりにタイプミスの多い書類を渡された時は「武士くん」と呆れたように呼ぶこともあった。

その間に大山は主任から課長に昇格していた。

大学時代の友人三人と飲んだ時に会社の話をすると、ずぼらな大

山への笑いの後に友人の冴子は、

『なんだか、真紀らしくないよね』

と言った。

『らしくない。かな』

真紀は友人達の自分の印象がいったいどんな風なのか聞いてみたくなった。

『クールでドライ』

『祐樹君の時も、毎日のように部屋に来るのを怒って、鍵を帰してもらったじゃん』

『そうそう、落ち込む祐樹くんに「ちゃんと約束してから来れば問題ないよ」と学食で言い切った雄姿は、今でも語り草だよ』

『真紀はモテたしね』

スタイルの良い真紀は、大学に入る頃から良くモテた。田舎の子高校生の時は、背も高く目鼻立ちがハッキリした容姿のために、通学途中ですれ違う男の子に振り返られることはあっても、告白されることはなかった。

その後も三人は、真紀が男性を簡単に振るといって盛り上がり、真紀はその都度いい訳をしながらビールを注文した。

『だって、自分の時間と二人の時間って分けたいじゃない』

真紀の言葉に、冴子と凜子は頷いたが、

『それでも、頭の中から離れないのが恋だと思っただ』

と、いつも恋人への不安や愚痴を溢していた志津香が、カクテルグラスの縁についていたオレンジを齧りながら言った。

この子は、相変わらず男に振り回されてるんだ。純情なんだな！

と真紀は心の中で微笑んだ。

大山と仕事を始めてから二年が過ぎた夏に、事件は起こった。

「ふーん、ふーん」

真紀を見て、仕切りに鼻を鳴らす大山に「朝からなんですか？」と言つと、

「髪を切ったんだね。サツパリしていいよ」

両手をカニのようにチヨキチヨキとして見せた。

「切ったのは昨日です。気づくのに二十四時間かかって、褒められなくても嬉しくありません。しかも、サツパリしてなんて言う褒め言葉しか浮かばないんですか」

「嘘！昨日は部長に呼ばれて、焦っていたから気が付かなかったのかな」

「そう言えば、帰ってきてから顔色が悪かったですよね」

「まったく、ろくでもない話ばかり持ってくるから、俺の髪が薄くなるんだよ」

「あー、まだ大丈夫だと思いますけどね」

真紀の視線をオデコに感じた大山は「これ以上後退したら、俺は潔く髪を貼る」と潔いの良いのか悪いのか分からない事をキツパリと宣言した。

「ほら、また部長が怖い顔して近づいて来ますよ」

日頃は温厚な矢沢部長の顔が、ここ数日は急に不機嫌になったり落ち込んだりしていた。

「また、髪が抜けるよ」

大山は冗談を言って、白髪の綺麗な矢沢と一緒に部屋を出て行った。

役員用の最上階の応接室に入った、大山と矢沢を待っていたのは地方選出の政治家Aと会社の顧問弁護士だった。

「どうやら、捜査を止めることは出来ないようだ。公取（公正取引委員会）としても、この事案を今年の目玉に据えるつもりらしい」

政治家のAは、ガラスで出来た灰皿にタバコをもみ消しては、イライラと新しいタバコに火をつけた。

「先生には迷惑のかからないように配慮いたします。事前に情報を頂いて感謝しています」

矢沢は顧問弁護士の顔を見ながら唇を振るわせた。

「私の方も最大限の努力はしますが、公取にも面子がありますから」

顧問弁護士は目の前に置かれた『XX県老人福祉センター建築計画』と書かれたファイルを開きながら言った。

大山は三人の遣り取りを黙って聞いて、矢沢と共に応接室を後にした。

「部長、いいんですか？」

最上階から戻るエレベーターの中で横に立った大山は小声で責めるように尋ねた。

「この業界にいる限り、覚悟は決めなきゃな」

今年の春に二番目の娘を嫁に出し、定年まであと4カ月と迫った矢沢は、諦めたように前を向いたまま答えた。

「ちゃんと、責任をとる条件を出した方がいいですよ」

大山が言い終わると、エレベーターが開き二人の男は黙って部屋に戻った。

## 第2部 下弦の月

夏のうだるような暑さが終わり、少し涼しくなった朝。真紀がいつものように会社に入ると、ザワザワとした、ただならぬ雰囲気が出た。会社を包んでいた。

「今日は、全ての業務を中止して公正取引委員会の方々の調査に協力してください」

大山が集まった課員に努めて冷静な声で言ったが、その顔つきは連日の徹夜で痩せこけていた。

部屋の中に矢沢の姿を探したが見当たらず、机の中の書類は既にダンプボールの中に入れられていた。

三ヶ月の捜査が終わわり年末になると、矢沢の解雇と大山の異動の通知が言い渡された。

「飲みに行きませんか」

初めて真紀から誘った。

「そうだな、真紀と飲みに行くのも最後かも知れないな」

「急な異動で、送別会も無いみたいですね」

「仕事納めの日に出た通知が出て、仕事始めには赴任だからね」

「他の人から誘われたら、ドタキャンしてもいいですよ」

「真紀を最優先でしょう。それに誘ってくれた人に迷惑をかけたくないしね」

「大山さんらしいですね」

大山は、寂しそうに笑うと、黙って机の中を整理を始めた。異動の内示は二週間前に、新しく来た部長から言われていた。

「ほとぼりが冷めたら戻してやる。それまでは、大人しく地方で営繕課の仕事を手伝っている」

そして最後に「明日は我が身だな」と呟いて大山の肩を叩いた。

「戻れそうにないな」

過去に左遷をされて戻った者はいなかった。

夕方になり、まだ仕事をしている同僚に「お世話になりました」「元気で頑張れよ」と言う簡単な挨拶をして大山は立ち去った。

黒のパンツスーツを来た真紀が、出口のところまで待っていた。

「お疲れ様でした。大山課長」

「何処行く？」

「今日は私がお洒落な店にご案内しますよ。武士くん」

大山が会社の人に会うのが嫌だろうと思い、一度だけ行ったことがあるバーに誘った。

「いつもこんなお洒落な店で飲んでるんだ」

大山は背の高いスツールに足の置き場が定まらずブラブラとさせ居心地を悪そうにビールを頼んだ。

「めつたに来ません。立って飲む店にも行きませんがね」

真紀は前に連れて行かれた立ち飲み屋のことを思い出して笑い、

「いつも、居酒屋しかご馳走しなかったものな」

と頭を掻いてビールを一口飲んだ。

二人は安定の悪い椅子に座って、カラオケで大山が騒ぎ過ぎること、真紀は酔うと寝てしまうことなど、笑い話を一時間ほどしたところで、真紀が真面目な顔で尋ねた。

「部長は、納得してたんですか」

真紀は温厚で、外出の度にお菓子を買って来てくれる矢沢に好感を持っていた。

「納得してたよ」

大山は捜査が始まる前日に矢沢に誘われ、高級な料亭で酒を飲んだ

ことを思い出した。

「俺と山戸は、学生時代に同じテニス部だったんだ」

山戸と矢沢が呼び捨てにしたのは、社長のことで、二人が学生時代からの友人であることは噂で知っていた。しかし、社内で会った時はもちろん敬語で「社長」「矢沢」と呼びあっていた。

「あいつは、テニスも上手くて男前だったから、俺は良くラブレターの配達係りをしたよ。俺は昔からゴツくて口下手だったから、モテなかったしな。」

『お前みたいな真面目で朴訥とした男が、親父の会社に入ってくると、将来俺が跡を継いだ時に心強いんだがな』

なかなか就職が決まらない俺に、そう言って頭を下げたアイツの姿を今でも思い出すよ」

矢沢は就職が決まらず困っている自分に、頭を下げた山戸の気持ち嬉しくて入社したのだった。

「それでも、退職金も無しに辞めるなんて」

「裏から出る退職金を受け取って、将来、山戸に迷惑をかける訳にはいかんさ」

「でも……」

納得しない大山の言葉を遮るように、徳利の首を持って「ほら」と酒を勧めた。

「長年、たいした功績もない俺を見捨てもせずに、本社の部長にまでしてくれたあいつに少しは恩返しが出来るんだから有難いよ」

「それは、部長が地道な営業活動で今の地盤を作ったからじゃないですか。当然の処遇です。いや、他の取締役の連中より貢献してますよ」

新入社員の頃に支店で一緒に働いていた大山は矢沢の実直な働きぶりや、面倒見の良い性格を尊敬し慕っていた。だから、本社で矢沢の下で働けることが決まった時は、真っ先に「また、迷惑かけに行きます」と嬉しそうに電話をしていた。

事件の責任を自分ひとりで背負い込み、大山にその口裏あわせを頼んだ時も、迷惑だと感じるよりも、頼りにされたことの喜びの方が大きかった。

「そう言ってくれるのは有難いが、実績がものを言うのが社会だ。それに、お前以上に俺の出世を望んでくれたのはあいつだったんだよ。」

毎年、直筆の年賀状に早く『お前が取締役会に出てくることを待っている』そんなことを書いていたんだからな。

お前にも苦勞をかけるが、お前が逮捕されたりすることはないし、将来のことはキチンと約束させるから、それは安心してくれ」

矢沢が居住まいを正して、深々と頭を下げた姿を、飲みなれないスコッチウイスキーのグラスについた水滴を見ながら、大山は思い出していた。

「何を考えてるの？」

真紀が肩を揺すった。

「男のことだよ」

「大山さんの口から、そんな気障なセリフが出るとは思わなかった。一瞬、佐藤浩市が隣に居るのかと思っただわ」

「本当は、温水さんだと思ってるんだらう」

「そこまでは思ってませんよ。大山さんは素敵な人ですから」

「ありがとう、真紀、今夜は帰さないよ」

大山は二枚目を気取ってふざけた。

「いいわよ。って言ったらどうします？」

真面目な顔で答える真紀に、困った大山は「んじゃ、次はカラオケに行くかぁー」と陽気に右手を上げた。

ホテルのネオンにドキドキしながら、カラオケボックスへの道を歩く大山のスーツの袖を、真紀はつまんだ。

大山は不意につままれた袖口から真紀の体温を感じ、心臓の鼓動が早くなった。

「この曲でいいの？」

大山が一人で数曲歌った後に真紀が入れた曲が画面に映ると驚いて尋ねた。

「私の生まれた町の歌です」

「月の砂漠……かあ……」

大山が小さな声で歌う真紀の声を聞きながらポツキを啜えた。

店員の「残り時間10分です」の電話で、二人は帰ることになった。

「大山さんは、なんで結婚しないんですか」

年末で賑わう夜中の繁華街を歩きながら真紀は大山の腕に手を回した。

「なんとなく気がついたら、かな。モテる方でもないしね」

「どうしてですか？」

「どうして？ 魅力あるタイプじゃないからね」

大山は腕に感じる真紀の胸にドキドキしながら答えた。

「私には佐藤浩市に見える。って言ってるじゃないですか」

「止めてくれよ、大きな声で。恥ずかしいから」

真紀は、『ホテル』の看板の前を足早に過ぎようとする大山に言った。

「今夜は帰さないんじゃないですか」

「これ以上は飲めないよ」

大山は困ったときにする鼻をモジモジいじる癖をしながら駅に向かおうとした。

「魅力ないのは、私みたいですね」

真紀は大山の腕から手を解くと少し離れて歩いた。

「真紀には、真紀に相応しい男がいるよ」

真紀の好意を感じていた大山は、鼻をモジモジいじりながら少しゆっくりと真紀が追いつくのを待った。

「私も来月で会社を辞めます。契約もちょうど切れるし。そしたら、田舎に帰ろうと思ってます。今回の事件で私も少し都会に疲れました」

「そうだね、少しゆっくりするといいよ。真紀も巻き添えを食って調査の対象にされたからね」

「頭にも来たし、仕事にもならなかったけど、大山さんと運命共同体みたいで嬉しかったです」

「ありがとう。こんな時は、なんて誘ったらいいのかな」

真紀の手を握った大山の手のひらは、真冬だと言うのにビシヨビシヨに汗をかいていた。

「佐藤浩市なら……君を抱きたい。ですかね」

真紀は鼻水でくぐもった声で大山の胸に顔を埋めた。

「君を抱きたい」

気取った大山の声に笑いながら、二人はホテルの中に消えていった。

### 第3部 三日月

年が明けて、暫くの間はメールと電話で遣り取りをしていた。

真紀は田舎での退屈な暮らしと、新しい仕事がなかなか決まらないことを嘆きながらも、久々に両親の小言を聞くのも悪くないと言うと、大山は新しい支店の成績が振るわないことと、今のところ仕事らしい仕事を与えられないのは退屈だけど、暫くはノンビリ過ごすと気楽に答えていた。

大山からのメールが少しずつ減り、電話をしても曖昧に切ることが多くなった。最初は心配していた真紀だったが、他に好きな人が出来たのだろうと諦めることにした。

「遠すぎるよね。三百キロ以上離れてると、想いも離れちゃうのかな」

最後の夜に大山の腕の中で交わした会話を思いだしながら、子供の頃から悲しいことがあると来ていた浜辺に立ち携帯電話のアドレスを消そうかどうか迷っていた。

「いつからだろう真紀のことを好きだと感じていたのは」

「私は今でも大山さんが好きかどうか分からないわ」

「僕が理不尽な客に電話口で謝っている時に、僕の足を蹴飛ばしたのを憶えてる？」

「憶えていますよ。あの時はすいませんでした」

『脛をヒールの踵で蹴られたから痛かったよ』

『大山さんは、』

『謝ることが僕のプライドなんだよ』って言いましたよね』

『真紀は』

『そんな弱いプライドじゃ大切なものは守れません』って怒ったじゃない』

『今は、そう思ってますよ』

『その時に、真紀なら守りたいと思ったんだ』

『私は、誰にも守って欲しいとは思ってません』

『そう言うと思ったよ』

冬の冷たい海風に纏わり付く髪を携帯電話を持った右手でかきあげた真紀を、新月の薄い明かりが微かに照らしていた。

家でブラブラする生活にも飽きてきた真紀は、母が以前パートをしていた魚の加工工場で働くことにした。たまたま、経理をしていた年配の女性が体調を悪くして辞めることになり後任を探していたのだ。

田舎の家族的な小さな会社に勤めることに気乗りはしなかったが、他に仕事もない田舎町では、比較的良好い仕事だと諦めて通い始めた。

母親の軽自動車朝の七時に出社し、三つしかないデスクを拭い

て七時半にくる男性社員にお茶を淹れることから一日は始まる。帳簿の整理をして請求書を発行する仕事は、すぐに慣れ半日もすると仕事が無くなってしまう。

時には工場のパートさんが休むと、「今日は工場を手伝って」と当たり前のように言われ、魚を開く手伝いをすることもあった。

派遣なら契約以外のことをしなくていいのに

と、そんな時は思ったが、温厚で欲の無い人達に囲まれて仕事をすることに安らぎも感じていた。

田舎に戻って半年が過ぎた夏の夕方に、大学時代の友人、志津香から結婚式の招待状が届いた。

少し前に電話で話をした時には東京で結婚式をすると言って、立派なホテルをいくつも口にしていたが、案内状に書かれていたのは地方の結婚式場の名前だった。

その日の夜に冴子から電話があり

「結局、のび太くんの地元で式をあげることになったらいいよ」

遠い所まで行くことに不満タツプリだった。

「何でのび太くんなの？」

「しずかちゃんにゾッコンなのはのび太って決まってるでしょう」

東京に居る間に、散々のろけ話を聞かされた冴子は、うんざりするよつに言った。

「凜子はどうするって?」

「凜子は、海外に赴任した彼に会いに行くから欠席しますって行ってたわよ」

乗り遅れた感のある冴子は、言い捨てて電話を切った。

結局、待ち合わせて一緒に行くには、東京とこの町では不便だと言つことで別々に行くことにした。翌日が休みの真紀は、一泊することを提案したが、冴子に断られた。

久しぶりに電車に乗って出掛ける真紀は、結婚式用のドレスを入れた大きな鞆を持って旅行気分だった。山を貫くように走る電車から見える景色は、トンネルごとに早い秋の訪れを感じさせた。

「志津香は幸せそうだったわね」

真紀が、賑やかで盛大な結婚式の後で、カレーライスがメニューに載っている喫茶店で冴子に言った。

「それでもないみたいよ。雪国の冬と田舎のしきたりが嫌だって愚痴ってたわよ」

「でも、ここに住むことは決まってたんでしょ」

「そうだけど、同居までは考えてなかったみたい」

「確かに、都会育ちの志津香には大変かもね」

真紀は降り止みそうにない雪を見ながら、いつも夢みたいなことから言い切っていた志津香の顔を思い出した。

「じゃあ、そろそろ行くわ」

冴子が腕時計で帰りの電車の時刻を確認し駅まで二人で歩いた。

「秋の日本海を女ひとりで満喫してね」

手を振る冴子に小さく手を振り返して電車を見送った。

真紀はホテルに向かう途中のパチンコ屋から出てくる見覚えのある横顔を見つけ、急ぎ足で近づいた。

「大山さん」

不意に名前を呼ばれた大山は、驚いた顔で真紀を見つめ鼻をモジモジといじった。

半年振りに見る大山は、細かった頬が更にやつれ、目は生氣なく窪んでいた。着ていた会社の作業着は皺くちやで、荒んだ暮らしが容易に想像できた。

「なんで、この街に居るんですか？」

さつきまで冴子と居た喫茶店でコーヒーを飲む大山に尋ねた。

大山が転勤になったのは、この街から100キロほど南にある支店だったが、2カ月もしないうちに異動になった。

「どこに行っても、厄介者みたいだよ。腫れ物に触るとはこのことだね」

どちらの支店でも仕事は与えられず、話しかける者も居なかった。左遷になった事情はそれとなく分かっていた支店の社員は、同情はしても係わることは避けていた。

最初のうちはノンビリとしてから本格的に仕事をしようと思っていたが、仕事もせずに支店に居ることに耐えられず、今までしたこともないパチンコや競馬に明け暮れるようになった。

「何をしても文句は言われないけど、自分が邪魔者だと思いつながら過ごすのは辛いもんだね」

「どうして辞めないんですか、身体も心も壊れてからじゃ遅いんですよ」

真紀には中学生の時に叔父を自殺で亡くした経験があった。

都会の研究室に勤務し、難しい物理学の話当真紀にも分かるように説明してくれる叔父は、真紀の憧れであり、父の自慢の弟でもあった。

叔父の様子がおかしいと最初に言ったのも真紀だった。

お盆の休みに帰って来た叔父は一人で海を見ながらブツブツと言つては、しきりに頭を下げていた。そうかと思つと急に頭をかきむしり号泣して砂浜に寝転がった。その様子を部活の帰りに見かけた真紀は、家に帰って父にその話をすると、父は夜遅くまで毎晩のように叔父と話をしている様子だった。

叔父が研究室の庭にある木に首をつつて亡くなったのは、お盆休みが終わって帰った翌日だった。会社の人の話で、研究の成果が出ないことを気にかけていたと聞かされたが、後で、叔父の恋人だった人から研究していたテーマが打ち切りになり慣れない営業の仕事に異動を内示されたのが原因だと教えられた。

叔父の葬儀の日に、火葬された煙突から出る煙を見ていた真紀に父が言った。

『叔父さんは病気で死んだんだよ。【絶望】という病気になってね』

『・・・・・・・・』

『辛くて悲しく心が病んでしまつたら、その場所から逃げてもいいんだよ。絶望しなければ人間は生きていけるのだから』

大粒の涙を流しながら言った父の言葉と叔父の恋人のやつれた顔が、真紀が簡単に心を開かない性格になつた理由のひとつだ。

他人に心を許したり信じたりしたら、裏切られた時に絶望してしまふ。いつも逃げられるように、相手と距離を置いて生きようー

真紀は無意識にそう思って来た。大山と出会うまでは。

「会社を辞めても、あてがないよ。」

大山は興奮する真紀に小声で言った。

「大山さんならどこでも勤められるでしょう」

「前の僕ならね。今は仕事を探す気力もない」

「なんで、そんなになってしまったんですか」

「さあ、なんでだろう」

大山は黙ってレシートを手にとると、苦笑いをして出て行った。

支店に来てからの大山は、ほとんど誰と口を利くこともなく一日を過ごし、帰りに居酒屋で泥酔するまで飲んで眠る生活を送っていた。しだいに、支店の中に居るのも苦痛になり、適当なことを言っでは外出したり休んだりしてパチンコや競馬で金を使い、サラ金からの催促がくるようになっていた。

俺は、いつまでこんな暮らしをするのだろうか。この先の見えない砂漠を歩き始めたら、引き返すことはできないのだろうかー

最後の日に真紀が歌った『月の砂漠』を口ずさみながら、居酒屋の暖簾を潜った。

## 第4部 上弦の月

真紀の海辺での暮らしは、変わることなく1年が過ぎ、二十七歳になった。田舎町では同級生のほとんどが結婚し二人目の子供がいることもめずらしくなかった。

「真紀ちゃんは決まった人はいないの？」

工場で魚を開く仕事を手伝っていると、毎回のように聞かれ、毎回「いるような、いないような」と答えることにしていた。

もしも、「いない」などと答えたら、翌日から矢のように見合いの催促をされるのは経験済みだった。そして、真紀が「いるような」と言う時にいつも頭に浮かぶの大山だった。

「早く結婚して咲子さんを安心させないと」

結婚話の最後は、必ず母、咲子の話題となり、母がいかに魚を捌くのが早かったか、陽気で人当たりの良い人だったかを聞かされる。しかし、家での咲子は、愚痴っぽくいつも漁協に勤めていた父、圭介に文句を言っている人だった。

圭介が銀行に勤めていた時にスキー場で知り合った二人は、一年の交際を経て結婚をした。それから、1年ほどして圭介は突然会社を辞めてしまったのだ。上司と喧嘩をして行きずらくなったという、単純な理由だった。

咲子は、そのことを今でも娘の真紀に「お父さんが短気を起こすから、こんな魚臭い街で生きていかなきゃいけなくなつたのよ」と文

句を言っていた。

そんな母が、この街で生きるために魚を開き、近所のオバサン達と仲良くしていたのだと思うと、母の一生が惨めでいじらしく思える。

真紀は魚を開く仕事をした日は、海沿いに2年前に出来た町営温泉場で魚の臭いを落としてかえることにしていた。

大きな内湯と海の見える露天風呂は、休日ともなると顔見知り賑わい、休憩室は農産物の交換所のように地元言葉と新鮮な野菜があちこちで飛び交っていた。

真紀の行く平日の夕方は、朝の早い漁師にとっては既に夕食を済ませて寝る準備に入る頃で比較的空いていた。

「今日は露天風呂独り占めだわ」

真紀は師走の海に浮かぶ上弦の月を見ながら、『月の砂漠』を口ずさんだ。

子供の頃から、親しんだ曲が最近深い悲しみの曲として感じられた。

時には魚を開き、三年前に死んだ祖母の看病をして年老いていく母の人生や、決まりきった毎日を過ごしてテレビで野球を観戦することだけが生きがいのような父の枝豆を食べながらビールを飲む後ろ姿そして、やつれ切った大山の横顔。どれも、砂漠を下を向いて歩いて行くように思えた。

「東上さん？」

竹で出来た衝立の向こうから、懐かしい大山の声が聞こえた。

「大山さん！大山さんなの？」

真紀は湯船から飛び出し、衝立に顔をつけるように叫んだ。

「真紀に逢いに来た。って言ったら迷惑かな」

大山も衝立に顔をつけてた。

「ずっと、待ってた。ここに居れば大山さんが来てくれると思ってた」

「僕もこの街で暮らしていいかな？」

「何もない街よ」

「真紀がいるよ。それに、海に浮かぶ月もある」

「今日は上弦の月。これから、満ちていく月です」

荒んだ生活で身体を壊した大山は、本社の人事部長から退職を勧められた。もしかしたら、また本社で営業の仕事が出来るという希望だけで日々を過ごしていた大山にとっては、最後の支えさえも外された気がした。

全てをぶちまけて会社に復讐することも考えたが、逮捕される前に

交わした矢沢との約束だけは守らなくていけないという思いが大山を止めさせた。

『これは、山戸に対する感謝でも会社に対する忠義でもない。俺のプライドだ』

矢沢の『プライド』と言う言葉に、大山は重いものを感じた

『わかりました。矢沢さんのプライドを守ります』

あの時に交わした約束は、男として一生をかけても守らなければいけない大切な約束だと思った。

「不意に死のうかと思った時に、真紀の言葉を思い出したんだよ」

露天風呂の縁に座り、上弦の月を見ながら大山は呟いた。

「『絶望しなければ、いくらでもやり直せる。絶対に絶望しちゃ駄目だからね』って真紀が夏に偶然会った時に言った一言がね」

「憶えていてくれたんですね。あの古い喫茶店のドアを開ける大山さんの背中に言った言葉を」

「あの時は『もう絶望しているよ』って心の中で呟いたけど、まだ、絶望していなかったみたいだ」

大山はマンションのベランダに足をかけた時に吹いてきた風の音が、真紀の声に聞こえて寸前のところで思い止まった。

翌日には、辞表を提出し上乘せされた退職金でサラ金の返済を済ませた足で真紀の住む海辺の街に向かう電車に飛び乗ったのだ。

電話をしようかと何度も迷ったが、もしも迷惑そうな声を聞いてしまったら、また絶望の縁を歩きそうな気がして掛けることが出来なかった。

当てもなく海辺を歩き疲れた大山は、目に付いて入った温泉場で真紀に再会出来たことは閉ざされたと思った人生を、もう一度開く鍵を持っているのが真紀であることを確信した。

大山は海の見える古いアパートを借りるために訪れた不動産屋で、前職での経歴と真紀の身元保証によって勤めることが出来た。

二人は仕事が終わると、温泉場で待ち合わせをして大山のアパートに行き真紀の作る夕食を食べた。小さい街では、真紀と見知らぬ男の噂はすぐに広まり結婚のお膳立ても自然に出来上がった。

「このアパートから見る月も春までだね」

裸の上半身を起こして大山は小さな窓から木々の間から見える月を眺めた。

「今度住むところからは、海は見えないけど月は見えるわよ」

少しずつ健康な身体を取り戻した大山の背中に寄りかかりながら、裸の真紀が呟いた。

「これからは、地味な生活になるけどいいの」

大山は真紀の体温を感じながら改めて尋ねた。

「子供の頃ね、月の砂漠を歩く王子さまとお姫様は、どんなに寂しいことだろうと思ったわ。黙って駱駝に乗って行く二人。でもね、今は何も無い砂漠を王子様の背中を見て歩くお姫様は、どんなに幸せな気持ちだったのだろうと思うの」

真紀は、大山の問いに答えずに月の砂漠を歌い始めた。

年が変わり1週間もすると父の圭介が朝食を食べながら読んでいた新聞に政治家Aの写真が載っていた。

『XX県福祉センター建築に贈収賄の疑い』と太文字の見出しが付いていた。読みかけの新聞を圭介から奪うと、そこには山戸建設の他に数社の建設会社の名前が載っていた。

## 第5部 十三夜

贈収賄事件の記事を見た真紀は、大山の携帯に電話をした。

「もしもし、新聞は見た？」

「新聞をとってないから」

「山戸建設が贈収賄事件で取調べを受けているみたいよ」

「えっ、すぐに新聞を買ってくるよ」

駅で新聞を見た大山は、すぐに矢沢に電話をして事実を確認した。

「新聞の記事は本当なんですか？」

「ああ、事実だ」

「これじゃ、矢沢さんがプライドをかけた意味がないじゃないですか」

「……………」

「まさか、この件までひっかぶろつって訳じゃないでしょうね」

「……………」

「こんどこそ実刑ですよ」

矢沢が個人の責任として会社を去った『XX県福祉センター建築』にかかわる談合事件は、もっと根が深く、仕事をとるために政治家Aに賄賂を贈っていたのだ。

それは、直接的にAに現金を渡すのではなく、地場の質たちの良くない建築会社を下請けに使い、請求を水増しさせるといふ巧妙な手口だった。地場の建築会社は、実質的にAがオーナーとなり他人の名義で経営されていた。

矢沢は、談合事件を握り潰すためだけに政治家Aを使ったのだと思っていたが、談合の摘発と引き換えに自分の収賄を見逃す約束を檢察と取り交わしていたのだ。

しかし、この件を嗅ぎつけた同じ選挙区の議員が、週刊誌にリークしたのだ。ことが公表されては檢察も黙っている訳にはいかず、お蔵入りさせていた事件を穿ほじくり返えしたのだ。

これ以上、ムチャをさせないために矢沢の元に向かう途中で、Aの秘書が自殺したという臨時ニュース電車の前面にある掲示板に流れた。

「真紀、ニュース見たか？」

大山は電車のデッキから真紀に電話をした。事務所での仕事をして真紀は、インターネットでニュースを確認した。

「今から矢沢さんのところに行く」

「なんで？」

「矢沢さんが危ない気がする」

「そんな危ないところに行かないで」

「僕は大丈夫だ。絶対に帰って真紀と月の砂漠を歩くよ」

「絶対なんて言葉は信じない」

「絶対がないから、約束をするんだよ」

「必ず帰って来るって約束してくれるのね」

「約束するよ」

携帯電話の電波はそこで切れた。

私の心の鍵を持っているのは大山さんだけなんだから、必ず鍵を開けに帰ってきてー

真紀は、『ツーツー』という電子音に向かって心の中で叫んだ。

大山は矢沢の住む街に着くと、誰かに見られている気がした。

駅前たむろの小さなコンビニの前の公衆電話には、数人の柄の悪い若者が屯して大山の様子を窺っていた。

このまま矢沢さんの所に行くのはヤバイかなー

事態は大山の想像していたよりも危険な匂いを漂わせていた。

ちよつと、早まったかなー

なんの力もない自分が、迂闊に動くことで矢沢にも自分にも大きな危険を及ぼすのではないかと後悔をし始めた。

このまま帰ろうかなー

「おい、あんた大山だろう?」

大山が駅に戻りかけると、

「ちつ、ちつ、違います。大山じゃありません」

紫のジャケットを着た茶髪の若い男に怯えながら答えた。

「じゃあ、誰だよ」

若い男は鋭利な感触を脇腹に押し付けながら、大山を車高の低いアメリカ車まで引き摺るように連れて行った。

大山との連絡が途切れてから3日が経ち、真紀はインターネットのニュース速報と、夜が明けない時間に見る新聞で安否を確認するしかなかった。

なんで連絡してくれないの? どこで何をしてるの? 必ず帰ってくるって約束したよねー

真紀は白く浮かぶ月を眺めながら、自然と涙が零れた。

矢沢の家まで大山を探しに行くことも考えたが、今日こそは帰って来るのではないかと。と毎日思っているうちに1ヶ月が過ぎた。

「大山さんは、どうしたんだらうね」

事件のことを何も知らない母親が、不満そうに朝食を作りながら呟いた

「必ず帰ってくるわ」

「そうね、でも、大山さんには、この街は退屈でつまらない街なんじゃない」

「それは、お母さんでしょう。この街を憎んでいるのは」

「どうして？ どうして私がこの街を憎んでいるの」

「いつも文句ばかり言ってるじゃない」

「海からの風も、ここに住む人達もベタベタして好きになれなかったわ」

「そんなに嫌なら出て行けば良かったのに」

「なんで逃げ出さずにいたのかしら。きっと、この街が私の生きる場所だったのね。お父さんと歩いていく」

「母さんは幸せ？」

「・・・・・・・・・・どうかしら」

お味噌汁から昇る湯気の向こうに見た母親の笑顔が、嬉しかった。

鬱々《うつうつ》としながら2カ月が経ち、海辺には早い春を告げる花々が咲き始めた。大山との結婚式まで1ヶ月を切り、キャンセルするべきか真紀は悩んでいた。

「大山君はどうしたんだ？ 連絡もとれないのか」

晩酌をしていた父親が、語気を荒げながら尋ねた。

「実家にも連絡がなくて、搜索願も出しているみたい」

「いったい何があったんだ？」

「分からないから心配なんでしょう！」

あの男は駄目なヤツだから諦めろと言う父親を怒鳴り、家を飛び出した真紀は大山と住む予定のアパートの部屋に向かった。

夜の海岸沿いを『二人でいろんな所に行こう』と言って大山の少ない貯金を頭金にしてかった小さな四輪駆動の車で走っていると、十五夜の月が小さく海の上に浮かんでいた。

真紀は、満ち欠けする月を見る度に、大山は既に死んでしまったのではないかという不安で一杯になり、あの月の裏側でひっそりと真紀が来るのを待っている気がしてならなかった。

そんな訳ないよね。約束したもんねー

アパートの鍵を開けるたびに、そこには大山が居るのではないかと思うのだから、いつも期待は裏切られる。

一緒にここから月を見るのを楽しみにしてたのにー

月明かりが入るように、この窓だけは薄いレースのカーテンをつけようと思っていた。

ついに結婚式まで後1週間になっても大山からの連絡はなかった。仕方なく式場をキャンセルし、出席者に延期のハガキを出すことになった。

「大山君は、きっと帰って来る。帰って来たら改めて式をしよう」

父の圭介は、痩せ細っていく娘に慰めの言葉をかけたが、早く忘れて新しい恋人を見つけて欲しいと願っていた。

良く晴れた4月の日曜に、真紀は結婚式場の前で立っていた。来ることがないと思っただけでも、真紀の足は自然と式場に向かっていった。

タッタッタ

急ぐ足音に振り向くと、知らない男が友人の結婚式に足早に向かつて行った。

今朝の新聞には政治家Aと山戸建設社長の逮捕が大きく報じられていた。

もう全て終わったんでしよう。早く大山さんを帰してー

真紀は手に持った新聞の上に大粒の涙をポタポタと落とした。

ウエディングベルと賛美歌のオルガン、そしてライスシャワーを浴びる歓声を聞きながら何時間も式場の門にもたれかかり大山を待った。真上に近かった太陽は、海に向かって沈み、大山の代わりのように月が昇っても、真紀はその場を離れることが出来なかった。

「そろそろ冷えてくるわよ」

母親の咲子が、立ち疲れてしゃがみ込む真紀にカーデイガンを渡した。

「うん、もう少ししたら帰るよ」

真紀は肩にかけてもらったカーデイガンを落ちないように掛け直すのと、上目づかいで母に向かって無理に笑ってみせた。

母親が帰り、ひとり取り残された真紀は、子供の頃から好きだった場所で満ちる前の月を見ていた。

月の砂漠をはるばると

真紀の携帯の着メロが鳴った。画面に【公衆電話】であることを知らせていた。

「真紀、ごめんね。結婚式に間に合わなくて」

それは、待ち望んでいた大山の声だった。

「どこにいるの？」

真紀は聞きたいことが、次から次に溢れてきたが涙でそれしか言えなかった。

「詳しくは会ってから話すよ」

「元気なの？」

「ああ、なんとか無事だよ」

真紀はその言葉だけで、全ての不安が吹き飛んだ気がした。

「『月の砂漠記念館』で逢おう。あそこなら、月が良く見える」

大山の言葉に無言で頷くと、海岸の道を走って『月の砂漠記念館』に向かった。

灯りに浮かび上がった記念館の前に大山の姿はなく、真紀は『月の砂漠』を口ずさみながら、満月の空を見上げた。

もうすぐ帰って来る。大好きな人が、私の心の鍵を持った大切な人が。約束どおり帰ってきてくれるー

「今日も満月だね」

振り向いた先には、やつれた笑顔の大山が立っていた。

「うん」

「真紀と露天風呂で再会した時も満月だった」

「うん」

「結婚式には間に合わなかったけど、約束どおり帰ってきたよ」

「絶対に帰ってくると思ってた」

「絶対は、ないんじゃないの？」

「そう、絶対なんて、この世の中にないけど、約束は信じられる。  
あなたの約束なら」

「風呂に行こうか」

大山は、真紀の手をとって海岸を歩き始めた。

月の砂漠を はるばると

二人だまって ゆきました

## 最終部 月の砂漠へ

駅前から連れ去られた大山は、組の事務所に連れて行かれ矢沢の居場所を聞かれたのだ。

「あのジジイ、どこに姿をくらましたんだよ」

「知りません」

椅子に座らされた大山は、机をドンドンと叩くチンピラに何度も同じ質問をされた。

「あの一、そろそろ帰っていいですか？」

大山はおそろおそろチンピラ風の男に尋ねると、黒のスーツにサングラスをした兄貴分が、「しばらくゆっくりしていきなよ」と言っ  
て携帯電話を取り上げた。

監禁されて3ヶ月したときに、矢沢が組長に連れられてやってきた。

「酷い目に会わせたな」

矢沢は、大山に土下座をして謝った。

「頭を上げて下さい」

「全て終わったから、もらって帰るよ」

「ああ、近くまでは送らせて貰うぜ」

矢沢の言葉に組長が、ポケットから車の鍵を出して茶髪の男に投げた。

事務所の重い鉄のドアを開けると、矢沢の背中に、

「落ち着いたら、うちの組で面倒見るぜ、アンタみたいに肝の据わった男は、堅気にしとくのは勿体無いからな」

組長が苦笑いしながら言った。

「いったい、どうなっただんですか？」

ベンツの後部シートに身を投げ出した大山が矢沢に尋ねた。

政治家の秘書が自殺した記事を読んだ矢沢は、山戸の身を案じて電話をした。

「この事件には係わるな、どこかに逃げている」

山戸のキツパリとした声は、自らが責任をとる決意を感じさせた。

「いいか、お前に何かあれば会社も社員にも大変な痛手だ。俺が行くまで変なことはするな」

サングラスにハンチングを目深に被った矢沢は、顔見知りの警備員に挨拶をすると裏口から専用のエレベーターを通って社長室に向かった。この通路は、先代の社長が極秘裏に人に逢う時に作らせたも

ので、山戸の代になってからはほとんど使われることはなかった。

「矢沢、そろそろ俺にも誇りを取り戻させてくれよ」

自分が全ての責任を被ると言う矢沢に、山戸がしつかりと目を見て否定した。

「分かった。俺に何か出来ることはあるか」

「三ヶ月間だけ、あいつ等の目をくらまして欲しい。3ヶ月の間に、俺が居なくなつた後のことを準備したい」

それから、矢沢は政治家Aに連絡をとり自分と政治家の秘書がやったことにする。遺書を書いて全てを闇の中に葬ることを約束した。

矢沢は三ヶ月間、ヤクザの監視の元で遺書を書き、贈収賄事件に政治家が係わっていなかったという資料の捏造ねつぞうをホテルで行なった。

重要なメモや資料は、すでに矢沢が処分していたので検察の捜査は難航した。政治家Aは国会での質問にノラリクラーリと答え矢沢が自殺するのを待った。

「遣りやがったな」

臨時ニュースを見ていた組長が、矢沢の隣で悔しそうに舌打ちをした。

「終わったんだな」

画面に映る『山戸建設社長 贈収賄の事実を認める』というテロップを見つめ矢沢が呟いた。

「どうする？ もう俺を殺しても金にはならないぜ」

矢沢は組長に向かって遺書を渡した。

「ふん、俺たちはAの子分じゃねえからな、金にならねえことには興味かねえよ」

組長は遺書を灰皿の中に置いてライターで火をつけた。

「落ち着いたら、山戸とテニスでもするか」

海に近い公衆電話のボックスのあるところで大山を下ろすと、矢沢がベンツの後部座席にから手を振ってチンピラと一緒に帰って行った。

月の砂漠～約束の鍵～

**最終部 月の砂漠へ（後書き）**

この物語は全て作り話です。  
この物語を僕の大切な人達のために。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4042e/>

---

月の砂漠～約束の鍵～

2009年3月24日10時17分発行